

(城西人文研究第15巻第2号)

ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの 遍歴時代』におけるマカーリエ神話

萩 野 静 男

『遍歴時代』におけるマカーリエ神話は、『ファウスト』第二部における「母たち」の神話と並び、老ゲーテの最も神秘的な創造物である。尋常な人間の領域から遠く離れたマカーリエの姿は、ただ象徴的にのみ描かれうる。しかし、多様な人間のタイプを叙述しているこの小説におけるマカーリエの存在の有様は、普通の現実を決して排除するものではない。彼女の姿はこの現実からそれよりも高位の「奇蹟¹⁾」の領域内へと高められ、際立っているのではあるが。

双方の領域——地上の領域と天上の領域——に対するマカーリエの関係を、ギリシャ語の形容詞 „μακάριος“ に由来するその名前が既に暗示している。„Makarie“ という名はそのギリシャ語の女性形であるが、これは「至福なる女性」を意味する。

プラトンも『色彩論の歴史』の中で「至福なる精神」と呼ばれている。彼は世界を予め知っており、世界を天上から見ることもかかわらず、他の者に己自身の「全なるもの、善なるもの、真なるもの、美なるもの」を人間たちに親しく伝えるために、地上に降りて来るのである。それに対し、彼はまたその根源への憧憬から、故郷である天上へと赴きもするのである²⁾。

この古代の人物と並んで、同様の至福の精神が同時代の女性にも現れている。『詩と真実』におけるズザンネ・クレッテンベルクがそれである。つまりゲーテは「至福の」という形容詞を、この女友達のまなざしに使っているのである。「…もしも彼女が…至福のまなざしを地上の事物に投げかけるならば、我々他

の地上の子らを混乱させるものが彼女によって全く簡単に解決されたのであった。そして彼女は正しい道を平凡な形で暗示することを心得ていたが、このことはまさに彼女が地上の迷宮を上から見下ろしており、自分自身はその中に囚われていないために可能なのであった³⁾。」

この二つの例から分かるように、「至福なる」という形容詞は、天上の事物と同様にまた地上のそれにも関連しているのである。従って既にマカーリエ（至福なる女性）という名称が、精神的には天にいるのだが、この世の混乱をたやすく解決することができる彼女の能力を示唆していることになる。

ヘルジーリエとユリエッテはこのこととの関連において「気品のある伯母」についてヴィルヘルムに語った。「彼女は彼女たちのところから余り離れていないお城に住んでいて、一族の守護霊とみなされるべき存在だということだ。体の方は病気がちで弱っているが、その精神の方は誠に健康で花咲くようであり、彼女の言葉を聴く者は、あたかも眼には見えなくなった太古のシビュラが、人間の事柄について純然たる神の言葉を全く簡明に述べるかのような印象を受けた由である⁴⁾。」

ゲーテはここでマカーリエを「太古のシビュラ」に譬えている。この呼称は、彼女の他の異名——「予言の巫女⁵⁾」,「聖なる女性⁶⁾」,「神的なる女性⁷⁾」——と共に古代の神秘的な女予言者のことを我々に思い起こさせる。神々は彼女等の口を通して、神意を尋ねる人間たちに神託を伝えたのである。それ故ここでは神々に関連したこの名前をもって、マカーリエがそのような機能を持つ古代のシビュラに等しい女性であることが言われていよう。すなわち、様々な問題に対する助言や忠告を求める人間たちに、マカーリエはいわばシビュラとして適切にそれらを与えるわけである。

マカーリエは人間の持つ様々な困難をその「精神と愛⁸⁾」によって取り除くことができる。この能力は、「世界精神に関与しているような直観的精神⁹⁾」のみが所有することができる、彼女の超越的直観力に由来する。世界精神は人間に外部のマクロコスモスを直観的に見ることを可能にし、ミクロコスモスとしての人間はマクロコスモスを映し出すのである¹⁰⁾。プラトンも世界を予め知っ

ている。つまり彼の内面ではその直観的精神によって、あらゆる地上的なるものが既に先取りされているのである。それゆえ彼もまたマカーリエと同様の仕方、世界に関与できるのである。ゲーテは、両者が直観力を備えているがゆえに、彼らを至福なる精神の持主とみなしているのだ。

マカーリエは彼女が天体の世界の中を通過して描く「かの精神の道筋¹¹⁾」にもかかわらず、尚も地上の人間的事物を気遣っている。彼女は惑星の領域に存在する形姿であるが、あらゆる地上的なるものに眼を向けている。彼女のこのような姿勢は、それに則って「人間が教育されなければならない¹²⁾」姿勢である。彼女が精神的にいかにも遠く太陽から離れようとしているにせよ、彼女は両親によって地上の生活と善行のために働くように教育されているのである。彼女の両親が施した教育がこのように両面的であるために、この「予言の巫女」は「世界からの神秘的逃避から確固として守られているのである¹³⁾」。

マカーリエの人間・道義的な努力は、この小説の筋の中では徐々に描き出されている¹⁴⁾。まず最初はヴィルヘルムに彼女の最も深奥の秘密は明かされておらず、ただ二人の姪によって彼女のことが簡単に話題にされたにすぎなかった。この後、その神的なる女性が現れるのは、レナルドーが一族の人々の所に帰って来ることについての文通においてである。この文通から、マカーリエがその親戚の間で仲介者——彼女を通じて親類縁者が互いに話し合うことができるのである——とみなされていることが判明する。彼女の役割は、その能力と性質によって果たされるのである。「…あなた（マカーリエ）は洞察力と公正さを同時に持っておいでです¹⁵⁾」。

また、人がその中に自己自身を見取ることのできる鏡としてマカーリエが機能していることにも、既にここでレナルドーが言及している。「…私は例の鏡の中に再び私自身を見てみたい¹⁶⁾」。

伯父の世界はさしあたり非常に自律的であるように見える。彼の博愛主義的で道義にかなった姿勢は、「所有と共有財産¹⁷⁾」という決まり文句に要約されている、封建主義的かつ社会主義的な自立した経済システムに表れている。こ

の伯父でさえ、克服できないような困難がある場合は、マカーリエを訪ねて助言を請うのである¹⁸⁾。伯父のこのような振る舞いによって、マカーリエが一族の人々の間で、道義的問題を扱う際の最高決定機関であるとみなされているに相違ない、という印象が強まるのである。というのも、彼の世界は初め極めて確実に管理されているので、彼は他の人間に頼る必要がないように思われるからだ。しかしそのような伯父にとってさえも、道德面でのマカーリエの導きは欠かせないのである。

マカーリエの世俗的な活動がこのように間接的に示唆された後、我々はこの小説の第一巻第十章において彼女が直接現前するのを見る。彼女の世界は様々な象徴をもって描かれている。まず「広い地域を囲むように見える高い石塀¹⁹⁾」が現れる。マカーリエの居住地を取り囲むこの石塀は、宗教的な聖なる領域と結び付いている象徴とみなすことができるであろう。というのは、教育州の聖域も「高い石塀」によって囲まれているからである²⁰⁾。

「父と息子は…高い石塀を眼前にすると…馬がこの区域に入ることは許されないで、そこからは徒歩でその大きな門に近づくように²¹⁾」懇請された。このことは、馬が「自然状態に近い野性的情熱の象徴²²⁾」として使用されていることを抜きにしては、考えられないであろう。すなわち、馬は動物的力を表しており、それが石塀の中に入ってはならないことは、取りも直さずそのような自然的力がマカーリエの居住地から遠ざけられていることを意味しているのである。

マカーリエの領域がこのように象徴的に描かれているように、彼女自身も象徴的表現の中で現れている。「アンゲーラ——その容姿と振る舞いによって好感を抱かせるその美しい女性を人はそう呼んでいた——はそれからマカーリエの到着を告げた。緑のカーテンが上がり、安楽椅子に座った初老のなんとも気品ある女性が、二人の可愛らしい若い娘に押されて入って来た…²³⁾」ここでは、カーテンの色——緑——が問題になろう。ゲーテはその『色彩論』において緑を「エロヒムの地上での生まれ変わり²⁴⁾」と考えている。それゆえ、緑色は地

上のものを象徴しているということができるであろう。従って、「緑のカーテンが上がる」というマカーリエの到着の叙述は、本来宇宙の領域に居住する精神的存在としてのマカーリエを覆う地上のヴェールが取り除かれたことを暗示していると思われる。

マカーリエの秘密——彼女の内面の本体——は、ヴィルヘルムの体験を通じてのみ段階的に読者に伝達されている。彼がこの秘密を報せる唯一の機関であり、読者は彼を通してのみ彼女の内面をおぼろげながらも知ることができるのである。ヴィルヘルムとマカーリエとの最初の会話も、彼女の秘密をある程度明らかにしている。「マカーリエはヴィルヘルムに、親しい者に話すように、話しかけた。彼女の親類縁者のことを才気に富んだ語り口で話すのを、彼女は楽しんでいるように思われた。まるで彼女は、各人の内面の本性を、その人を覆っている個人的な覆面を通して見透かしているかのようであった。彼女の話を聞いていると、ヴィルヘルムの知っている人物たちは、変容したかのように彼の魂の前に立ち現れたのである。この上なく高貴な女性の理解ある好意は、各人の表面的な皮を剥いでその内部にある健康な生命の核を研ぎ澄まし、それを生き生きとさせるのであった²⁵⁾。」

この会話から、マカーリエが個々人の内面を直観的に見透かしていることが明らかになっている。内面の本体をこのように直観的に認識することによってのみ、彼女は好意をもって各人を育成するというふうに、その人の内部のエンテレキア的な核に感化を及ぼすことができるのである。先に示唆された彼女の道義的活動も、その直観的洞察によるものなのである。

しかしながらこの会話においては、マカーリエが他人の本性を見透かして（またそれに関連したことだが）人間的・道徳的活動を行うことを可能にしている、宇宙の領域に組み入れられた彼女の存在状態には、まだ言及されていない。これは、彼女の秘密の段階的伝達に相応して、そうされているのである。

マカーリエの「家庭の友人²⁶⁾」である天文学者はヴィルヘルムを、「素晴ら

しい晴れた夜に星空の奇蹟を申し分なく体験することに参加²⁷⁾」させる。この場面でヴィルヘルムは「階段をぐるぐる回って天文台へと²⁸⁾」上って行く。ヴィルヘルムのこの螺旋状の運動が既に、惑星圏におけるマカーリエの螺旋形の運行を示唆していよう。「彼女は子供の時から太陽の回りを巡っていた、しかも発見されたところによれば、その運行は螺旋形を描いていた…²⁹⁾」

更に、天文学的観察に関する叙述が続く。「すべての星によって光り輝きながら、その誠に晴れやかな夜はこの観察者を取り囲んでいた。彼はその全く素晴らしい蒼穹を初めて見る思いであった³⁰⁾。」ここでは、ヴィルヘルムが空の星によって取り囲まれている情景が描かれている。この情景は我々に、モンターンの山の祭りを思い出させる。

この祭りも、夜の暗闇の中で行われる。「ヴィルヘルムは、その案内人が夕方頃になるともっとゆっくり歩くようになったのに気づくような思いすらした、暗闇の中でも彼らの歩む道にそれほどの障害はないかのように。しかし夜の闇が彼らの周囲に深まると、この謎は溶けた——小さな炎の群れが沢山の峡谷や谷間から揺れながら輝き出、それらが長い線となってつながり、山の高みを越えて転がるかのごとくやって来るのが見えた³¹⁾。」

古代のディオニュソスの祭りも夜に執り行われ、その際も松明行列が練り歩くので「炎の群れ」が辺りを動き回ることになる。このディオニュソスの祭りと同様に夜間暗闇の中で行われるモンターンの山の祭りを心待ちにして、「案内人」はヴィルヘルムを意図的にゆっくりと歩かせている——夜の闇が降りるまで³²⁾。

更に、山の祭りの「炎の群れ」は星のそれに譬えられる。「火山がその口を開けて爆発し、炎と大音響を辺り一帯に飛び散らしてそれを破滅の危機に陥れる時よりは、この光景は遙かに好ましいものであったが、長い線となった炎の群れは徐々により力強く、より幅広く、より押し迫るがごとき勢いで赤々と燃え、星の群れの流れのようにキラキラと輝き、それはなるほど柔和で愛らしいとも思えたが、それでいて大胆に辺り一面に広がりつつあった³³⁾。」それから、地上の星群——山の祭りの火の川——が一つの輪となり、ヴィルヘルムはこの

地上の星によって取り囲まれる。「…彼ら（ヴィルヘルムの一行）は、火の川が流れ込んで炎の海となり、その海の真ん中にできたいわば赤々と照らされた島のような場所に辿り着いていた。さすらい人は今や、眼も眩むような輪の中に立っていた。そこでは何千もの輝く光が黒い後壁となって並んだ松明の担い手たちと胸騒ぎのするようなコントラストを形成していたのであった³⁴⁾。」

夜間に星の群れと炎のそれとが、同様の回転運動を行っているのである。このことから我々は、星の観察と山の祭りとが対を成している、ということを推測しないではいられないであろう。天文学的観察は、マカーリエの圏内に所属している。他方、山の祭りはモンターンの領域に属しているが、彼の連れの女は、マカーリエが天上の女性であるのに対し、地上の女性なのである。この二人の女性の形姿において、天と地、不死と死、という対が体现されているように思われる³⁵⁾。マカーリエは不死である、何故なら彼女の精神的本体は神的であり、それが本来住む場所は地上ではなく、天上であるからだ。これに対し、地上の女性、つまり鉱石を感じずる能力のある女は死を表していよう。この女性の住処はマカーリエとは対照的に、天ではなく地である。『親和力』の中に現われたもう一人の鉱石を感じずる能力のある女性、オティーリエは死んでいる³⁶⁾。（彼女は石炭が埋蔵されている場所を通る度に頭痛がするのである³⁷⁾。）オティーリエとモンターンの連れの女とは鉱石を感じることができるという点で、同類とみなすことが可能であろう。従って『遍歴時代』の地上の女性も死の影を帯びている、と考えられるのである。

ところで、現実の天文学的観察は、ヴィルヘルムにマカーリエの精神的本体をまだ明かしてはいない。それはヴィルヘルムの夢が初めて彼に打ち明けるのである。天文学者の申し出に応じてヴィルヘルムは一眠りする、「その後すがすがしい眼で、まさに今日その全き輝きの中でその姿を現すはずの、日の出に先立っていそいそと出て来るウェヌスを眺め、それに挨拶を送るために³⁸⁾。」眠っている間に彼はある夢を見る。この夢は、これに先立つ場面におけるマカーリエの姿の描写を、幾つか部分的に再び取り上げているが、この夢はまた、そのより豊かな象徴によって、マカーリエの秘密、すなわち彼女の惑星に対する

関係をも、我々に見せてくれているのである。「私は静かに横になって、深く寝入ってしまいました。すると私は自分が昨日の広間の中にいるのが見えたのですが、私は一人きりでした。緑のカーテンが上がり、マカーリエの安楽椅子がまるで生き物のようにひとりでに前方へ動き出て来ました。その椅子は黄金色に輝いており、また彼女の衣服は司祭が着用するようなもので、彼女の姿は柔和な光を放っていたのです。私はひれ伏さんばかりでした。雲が彼女の両足の周りに次々に出来、それが上昇しながら翼のようになって彼女の聖なる形姿を持ち上げ、遂には私は彼女の壮麗な姿の代わりに、雲の割れ目に星を見たのです。その星は絶えず上へと運ばれ、開かれた丸天井の間を通過して上昇し、星空全体と合一したのでした。そして星空は絶え間なく広がり、すべてのものを包み込むように見えたのです。その瞬間にあなたが私を起こしました。私は寝ぼけてフラフラと窓の方へ歩いて行きましたが、例の星をまだ生き生きと私の眼中に見ていました。私が外を見やると——それと同じような輝くがごとき壮麗さはないかもしれませんが、同じ美しさを持つ明けの明星が現実には私の眼前に在ったのです！³⁹⁾」

この夢においては、最初にマカーリエがヴィルヘルムの前に姿を現わした時の象徴表現に、更に一層輝かしい表現が加わっている。

マカーリエの安楽椅子は黄金色に輝いている。ゲーテはその『色彩論』において、金色を黄色の一部と考えている。そして金色に輝きが加わると、「この色彩の新しい高尚な印象」が生まれ、それは「強い黄色が…華麗で高貴な印象を与える」ようなものだとして述べている⁴⁰⁾。従ってマカーリエの椅子の色も、そのような「高貴」さを象徴するものであろう。

「彼女の衣服は司祭の着るようなもの」だった、ということはマカーリエの異名「太古のシビュラ」に相応している。すなわち、ここで彼女は司祭——この者を通じてより高い諸力が人間に託宣を伝えるのであり、司祭はいわばその諸力の道具である——としての自己を露にしているのである。マカーリエの神的本性が、ここで明白になっている。

「彼女の姿は柔和な光を放っていた」、つまり、マカーリエは星のように光

を出していたのである。天文学者はヴィルヘルムの夢について彼の意見を述べているが、それによればマカーリエの星のごとき発光は、彼女の「神格化」(アポテオーゼ⁴¹⁾)を意味しているのである。マカーリエのような聖なる人間が星となって神化するというこのアポテオーゼの思想は、『聖ネポムクの宵祭⁴²⁾』という詩にも現れているところから、老ゲーテに稀なものではないようである。

「雲が彼女の両足の周りに次々に出来」、それが彼女を星辰界へと上昇させている。このことは、マカーリエの地上的なるものとの接触が決定的に終了したことを意味する、と理解してよいのではなかろうか。彼女のこの世ならぬ本性は、ここで完全に明白になっているのである。彼女は遂に星となり、全宇宙と一体になっている。この場面の象徴的表現は、マカーリエがあらゆる地上的なるものから解放される一方で、ますます精神化する過程を打ち明けているのである。

その「驚くべき夢⁴³⁾」,「天界の真摯な精通者の二三の言葉⁴⁴⁾」,「誰でも近づいてよい戸棚の中にある、<マカーリエの独白の言葉>という銘の入った、特に区別され錠をかけられた引き出し⁴⁵⁾」によってヴィルヘルムは次のことを推測するに至る。「かの天の光に関しての努力は単に学問的愛好、或は星辰界を知ろうとする努力を意味するのではなくて、むしろそこには星座に対するマカーリエの全く独自の関係が隠されている⁴⁶⁾。」「精神と意味の探究者⁴⁷⁾」であるヴィルヘルムにとって、この関係を明らかにすることは、非常に重要なのである。

ヴィルヘルムの「異常な精神的関与⁴⁸⁾」, 彼が「最も深い秘密を、予想に反して把握したこと⁴⁹⁾」によってアンゲーラと天文学者は、彼をマカーリエの秘密の中により深く案内しようという気になる。そこでアンゲーラは彼を「比喻によって⁵⁰⁾」その中に参入させる。というのも、「理解困難な事柄にあっては、この方法で切り抜けるのがよいからである⁵¹⁾。』

「人が詩人について、可視的世界の諸要素は彼の本性の最も奥深くに秘められており、それらはその内奥でただ徐々にその力を発揮しさえすればよいので

あり、彼が以前に予感の中で体験しなかったことは何一つその世界で眼に見えるようになってこない、と言っているように——ちょうどそのように、私たちの太陽系の諸関係がマカーリエには最初から根本的に生まれついており、それらが初めはじっと静止し、それから次第にその力を発揮し、更にはますます活気づいてきて感知できるほど明確なものになっている、と思われてならないのです。初め彼女はこの現象に悩み、それから彼女はこれを楽しみ、そして年と共にこれを楽しむ喜びが増して行っただけでした。けれども彼女がこのことについて気持ちの面で調和と落ち着きを得たのは、あなたもその功績を既に充分よく知っていらっしゃる例の家庭の友人の助力を獲得してからなのです。

数学者・哲学者として彼は最初、マカーリエがこの現象を観照して楽しんでいるということが信じられず、この観照が習い覚えたものではないか、と長い間疑っていたのでした。というのもマカーリエは、幼少の頃から天文学の授業を喜んで受け、情熱的にそれに没頭したということを告白しなければならなかったからです。しかし彼女はそれと共にまた、彼女の人生において何年もの間、内なる現象を外界の現象と比較したが、この場合一度も一致を見るに至りえなかった、ということも報告しました。

知者としての彼はその後、ただ時折完全に明確になって彼女に見えるものを、極めて正確に述べさせ、計算を行い、そこから、彼女が自己の内に全太陽系を所有しているというよりは、むしろ彼女自身が精神的に太陽系の不可欠な一部分としてその中で動いている、ということを結論したのです。彼はこの前提に従ってやってみました。すると彼の計算は信じられないほど、彼女の発言によって確証されたのです⁵²⁾。」

まず、「私たちの太陽系の諸関係」とは何か？ それは惑星間の秩序とみなすことができるであろう。この秩序がマカーリエに「根本的に生まれついている」のである。また、この「根本的に生まれついている」という言い回しの意味も捉え難いが、これは精神的存在としてのマカーリエが惑星の運動の法則性に従って太陽系の中で運行する能力を生まれながらに備えている、というよう

に解釈しておきたい。

惑星間の秩序（中心点としての太陽の周りの星位）は、マカーリエの内面には「最初から」存在するのである。しかしながら、マカーリエの内部に現存する「諸関係」は、常に同じ状態に在るわけではない。まずそれらは「静止」状態に在り、次に彼女の人生の経過と共にゆっくりとその運動の力を及ぼし、遂には知覚できるほど活発に動くようになる。しかもマカーリエは単に惑星間の秩序に満たされているだけではすまない。いや、それどころか彼女の内面では惑星の運動法則が以前にもましてその効力を発揮するようになっているので、彼女自身が精神的には太陽系内で一つの惑星となり、軌道を描いているのである。

天文学的計算が常に同じ立脚点に立っている一方で、マカーリエの精神的存在は惑星の軌道を描いているので、彼女の内面での立場は絶えず変化している。この事情で、彼女が内面で観察する現象と外部の太陽系の現象との相違が発生し、これが彼女を不安にさせているのである、天文学者の補佐があるまでは。このことは我々に彼女の精神活動の性質を教示している——宇宙の秩序は彼女の内部に現存し、彼女は精神的に他の惑星と同様に太陽系において運行を行っているのだが、彼女自身は自己の軌道を客観的・学問的に観察し、認識することはできないのである。

彼女の精神活動のこの性質ゆえに、天文学者（彼は同時にまた数学者・哲学者でもある）は彼女にとって欠くべからざる人物なのである。というのも彼自身は直観力を持っていないが、「知者」として「予言者」であるマカーリエを助けることができるからである。彼女の方は直観力を有していても、内面の不安な現象を明白に認識するためには、彼女の友人の学問的補佐を必要とするのである。内面の現象に関するマカーリエの発言に基づいて彼が計算を行い、これによってマカーリエの精神的存在が星辰界において正常に運行していることが結論され、彼女の不安は解消される。つまり彼の学問的計算は彼女に不可欠なのである。この二人の形姿——マカーリエと天文学者——は己の職務に対するゲーテの立場を象徴的に示していると思われる。「観ずること、知ること、予感すること、信ずること等、人間がそれでもって宇宙の内部を探る触覚がど

のような名で呼ばれようとも、すべての感覚はやはり本来共同して働かなければならないのである、我々が自らの困難ではあるが重要な職務を全うしようと思うのであれば⁵³⁾。」

第一巻第十章の終わりでヴィルヘルムはマカーリエに再び引き合わされる。ここでは「不思議な甥」(レナルドー)のことが話題になる。両者間の会話から、マカーリエが親族の間で諸困難を除去するような働きをしていることが明らかにされている。それゆえここでは、他人の内部の本体を直観的に認識するという彼女の能力による、その道義面・社会面での役割が再び問題になっているのである。

マカーリエの秘密は小説の終わり頃漸く完全に明るみに出る。しかしながら彼女の道徳的働きは小説の途中でも読者に感じられる。つまり『五十歳の男』においても、人はいざこざを調停する彼女の働きを見ることができるのである。そこでマカーリエは危機的状況に介入する。困り切った男爵夫人は、「かの人間をよく知っている女友達⁵⁴⁾」に、恋のもめ事に陥った人物たち——未亡人、フラヴィオ、ヒラーリエ、少佐——について手紙を書くのである。マカーリエは「すべての困窮した魂の持主——すなわち自分自身を見失ってしまい、再び自分を見いだそうと欲しながら、自分が何処にあるのか分からないすべての人々——の聴罪師なので⁵⁵⁾」、彼らの悲劇的結末を防止することに成功している。すなわち、「かの優れた女性」は、迷える者に「道徳的な魔法の鏡⁵⁶⁾」を差し出すことによって、彼にその自己自身を見いださせるのである。このようにして彼は「混乱した外面の姿を通して⁵⁷⁾」その「純粹に美しい内面⁵⁸⁾」を見通し、蘇ることができるのである。人間を蘇らせるマカーリエのこの働きは、偶然で一時的なるものの彼方に在る本質的なものを個々人の内部に観ずる、という彼女の能力によって引き起こされる。それはちょうど彼女が自己の内面に、地上的なるものの代わりに永遠の宇宙の秩序を観ているのと、同様である。

第三巻第十五章は、マカーリエの秘密の決定的叙述とみなされ、それは第一

巻第十章におけるこの秘密の単なる示唆的な叙述よりもより深いものを持っており、またこの秘密を敷衍して述べている。まず、太陽系におけるマカーリエの運行の姿が話題にされる。「マカーリエは太陽系に対して、敢えて言明してはならないような関係にある。精神、魂、想像力の中に彼女は太陽系を単に抱き、観ているのみならずまた、彼女はいわば太陽系の一部を成しているのである。彼女は自分が天体のかの周行運動の中で共に引かれて行くのを観ているのだが、それは全く独自の仕方ですうされている。彼女はその幼少の頃から太陽の周囲を巡っており、しかも発見されたところによると、螺旋状に、ますます中心点から遠ざかり、外域へと向かうように巡っているのである⁵⁹⁾。」つまり、宇宙空間におけるマカーリエの運行の姿に関するこの報告によって、宇宙秩序の中へ彼女の精神的本体が組み込まれている、という秘密が明示されているのである。

それから二つの相対立する存在様式一般の内面の傾向が挙げられ、マカーリエの「本体⁶⁰⁾」が明らかにされる。「存在が物的である限りは中心へと、存在が精神的である限りは周縁へと向かうということを仮定してよければ、我々の親しんできた女性は最も精神的な存在に属する。彼女はただ、地上的なるものとのつながりを断ち切り、存在の達しうる最も近くの間から最も遠くの間までを突き抜けて行くためにのみ、生まれたように思われる⁶¹⁾。」

精神的存在としてのマカーリエ及び物的存在としての鉱石を感じる能力のある女——モンターンの連れであるこの地上の女性は大地から離れ難い——が代表する二つの相対立する存在様式の、相反する運動方向がこのように仮定されていることは、ゲーテの日記に記入された世界精神の変身原理と密接に関連していると考えられる。「変身とその意味について。世界精神の収縮と拡張——前者からは特殊化が生じ、後者からは無限の領域へ果てしなく広がる普遍化が生ずる⁶²⁾。」

精神的存在としてのマカーリエは、ただ単に星辰の周行に自ら「独自の仕方です」について行くことができるのみならず、またその内面の輝きを直観によって認めることもできるのである。「彼女は、小さい頃から内面の自己が輝きを発

する存在によって満たされ、最も明るい太陽光線さえも曇らせることができないような光によって照らされているのを思い浮かべることができる。しばしば彼女は二つの太陽を見た、すなわち内面の太陽と天にある外のそれとを。また彼女は二つの月を見たが、その一方の外部の月は満ち欠けにもかかわらず大きさが一定であるのに、もう一つの内部の月はますます小さくなって行ったのである⁶³⁾。」

「…彼女は内面の光が弱まると外部の義務を非常に忠実に果たすよう勤め、内面の光が鮮やかに輝く場合には誠に幸福な安らぎに身を委ねたので、彼女の内部においても昼と夜があるように思われた。否それどころか彼女は、自分の周りに一種の雲が時折漂って天上の仲間の光景をしばらくの間遮るのに気づいた、とさえ言っている。それは、彼女が常に周りの人々の幸福と喜びのために使うことができる期間であった⁶⁴⁾。」マカーリエの両親は、彼女が精神的には天体の秩序に組み入れられていても、「彼女の行為や振る舞いが最も高貴な道義的なものに間断なく則っている⁶⁵⁾」ように彼女を教育した。しかしながら内面の光が強まって彼女がそれに身を任せる——すなわち、その精神が宇宙に帰り、そこで太陽の周りを巡る——ようになると、彼女はこの世界の事物に没頭できなくなり、道徳的活動は行えないのである。これに対し、内面の光が弱まった場合には、彼女は精神的にはもはや惑星の世界におらず、地上に行って世間のための活動をするのである。マカーリエ内部での昼と夜との変化は、このように、その精神が地上と天上との間を往来していることを示しているように思われる。

先のヴィルヘルムの夢にあった雲は彼女を地上から天上に押し上げていた。それゆえ、夢の中の雲は彼女の聖なる形姿を地上の重力から解放する機能を有するものであり、その運動方向は下から上であった。また、このことから分かるように、雲は地上と天上とを仲介する役割を帯びていた。ところが、ここでは雲はマカーリエの直観能力を妨げ、彼女が天上の仲間たちを見るのを邪魔している。そしてそれが為に彼女は地上の領域に配慮することができるのである。従って雲はここでは彼女の精神を宇宙から地上に下降させる機能を持っている

ので、その運動方向を考えると、前の場合とは逆の、上から下である。ただ、その役割は前の場合と同様に、地上と天上との仲介である。

更にここでは、彼女の天文学的「諸関係」が前よりもはるかに詳細に言及されている。すなわち、以前にはただ暗示されたにすぎなかったマカーリエの螺旋状の運行軌道がここで漸く詳細に叙述されるに至っているのである。「彼女の精神的全存在はなるほど宇宙の太陽の周りを巡っているが、常にその描く軌道を大きくしながら限りなく宇宙の彼方へと向かって運動しているので⁶⁶⁾」、彼女は外部の太陽からますます遠く離れて行っている。この理由から、「彼女、すなわち予言の巫女にはその幻想の中で…我々も見ることのできる太陽が、昼間見るよりもはるかに小さく観えるのである…⁶⁷⁾」従ってマカーリエは精神的には、実際よりも大きな距離を外部の太陽から保っており、しかもその距離はますます拡大しているのである。

宇宙において螺旋形の運行軌道を描いているマカーリエの精神の存在様式は、「このエーテルの詩⁶⁸⁾」の終わりで「エンテレケイア⁶⁹⁾」という概念で表される。「…他の陳述から、彼女が火星の軌道をとっくに越えて木星の軌道に近づいていることが結論された。明らかに彼女はしばらくの間この惑星のとてつもない壮麗さを驚嘆をもって眺め（どれほどの距離からそうしたかを言うのは難しかろうが）、その周りの衛星の戯れるような運動を観ていた。しかしその後彼女はこの木星を驚くほど独特のやり方で、欠けて行く月としてではあるが普通とは逆の上弦の月（本来満ちて行く月の姿がそうである）として観ていたのである。このことから結論されたのは、彼女が木星を横から観ており、実際にその軌道を越えて進み、宇宙の無限の空間の中を土星に向かって行かんとしている、ということであった。そこにまで向かわんとしている彼女に我々の想像力は追いつかないが、我々が希望するのは、そのようなエンテレケイアが我々の太陽系から完全に遠ざかることなく、もしそれが太陽系の境界に到達したならば、我々の子孫の地上の生活と善行のために再び感化を及ぼすという目的を持って、また我々のところに戻り来るようになるということである⁷⁰⁾。」

さて、我々はこれから、この非常に重要なエンテレケイアという概念の由来

を辿り、ゲーテがこの概念をどのように受容し、また彼がこの概念についていかに考えていたかについて考察してみたい。

最初にエンテレケイアに言及しているのは、アリストテレスである⁷¹⁾。この哲学者の場合、エンテレケイアという概念は、二つの意味を持っている。まずそれは、「ある一つの存在が辿る様々な発展段階の必然的順番の中で言えば、その存在の自己実現の最高の上昇段階、すなわちそれが到達しうる最高の自己実現の段階」であり、それはちょうど「かの満開に咲き誇ったバラやヘレネーの美しさ」のようなものである⁷²⁾。すなわち、エンテレケイア——ἐν τέλει ἔχειν——とは、「終わり（完成）の中に自己を持つこと⁷³⁾」なのである。次にそれは、「終わり、つまり完成という方向へ向けて自己を生き生きと保っておくことであり、このことからそもそもそれは、生き生きと自ら活動する存在の最も普遍的な概念⁷⁴⁾」なのである。というのも、アリストテレスによれば、エネルゲイア——ἐνέργεια——とエンテレケイア——ἐντελέχεια——とは相互に関連した概念であるからだ⁷⁵⁾。

キケロは ἐντελέχεια の代わりに ἐνδελέχεια（間断なく続くこと）という概念を使用している⁷⁶⁾。彼はこの概念を「一種の間断なく持続する運動⁷⁷⁾」であると、言い換えている。中世においては、トマス・アクイナスが ἐντελέχεια を actus（活動）と翻訳している。actus は ἐνέργεια と同一であるからだ⁷⁸⁾。中世以来このアリストテレスの概念は、持続する生命の意味においても現れた。16世紀の哲学にあっては、エンテレケイアは生命が活動を行うことを表している。メランヒトンがエンテレケイアを agitatio（活動性）と定義している⁷⁹⁾。

近世においては、ライプニッツがモナドをエンテレケイアであるとした。「人はすべての単純な実体、すなわち創造されたモナドに、〈エンテレケイア〉という名称を付与することができるであろう。というのも、モナドはその内部に一種の完成を保有しているからである。モナドの内部には自足が存在し、これによってモナドはその内部の活動の源泉となり、いわば非物体的な自動体となっているのである⁸⁰⁾。」

晩年のゲーテにあっては、以上見てきたようなエンテレケイアの概念史に現

れた、エンテレケイアの二つの側面——活動と持続——が共に受け継がれている。すなわち、彼は1827年のツェルター宛の手紙において次のように述べているのである。「エンテレケイア的モナドはただ休み無き活動状態においてのみ、保持されるにちがいない。たとえこの状態が他の性質を持つことになるとしても、そのようなモナドが働くのを止めることは永遠にありえないのである⁸¹⁾。」更にその二年後には、彼はエンテレケイアを、死を乗り越えて生き続ける不滅の生命の核と考えているようである——「…神の本性、不死、我々の魂の本質、そして我々の魂と肉体との関連といった問題は、その解決にあたって哲学者も我々を今以上には助けてくれないような謎なのだよ…私は我々の生命の永続を疑いはしない、というのも自然はエンテレケイア無しにはありえないからだ…⁸²⁾」これらの発言を総合して考えるならば、老ゲーテにおけるエンテレケイアという概念が、絶え間無く活動する永遠の生命の核を成すものである、と定義してよいのではなかろうか。

さて、ここで我々は、ゲーテによってエンテレケイアと名づけられた、星辰界を周行するマカーリエの精神的本体の考察に帰りたい。マカーリエの場合、アリストテレス・ライブニッツに由来するエンテレケイア的モナドの思想が、魂の運行に関するプラトンの考えと結合しているように思われる⁸³⁾。というのもプラトンは『ゴルギアス』、『パイドン』、『国家』第十卷、『パイドロス』において死後惑星の世界で周行する魂の運命について述べているからである。

ゲーテの作品に登場する人物の中で、エンテレケイアという術語によって表現されているのは、マカーリエの他にはただファウストがいるのみである。

『ファウスト』第二部の終わりの場面でゲーテは最初「天使たちの合唱団（ファウストのエンテレケイアを連れ来たりながら⁸⁴⁾）」と書いたが、その後彼はこれを「ファウストの不死なるものを運びつつ⁸⁵⁾」と書き換えたのである。この場面で天使たちはファウストについて「常に励みつつ努力する者を、私達は救うことができます⁸⁶⁾」と言っている。つまり絶えず活動するファウストのエンテレケイアは不滅なのである。

ライブニッツの影響下でモナドの思想と混合したゲーテのエンテレケイアに

関する思想は、不死についての彼の想像の産物である。このことは、ヴィーラントの葬儀日に交わされたゲーテのファルクとの会話が証言している。「私(ゲーテ)はいつか、宇宙のモナド、つまり第一級の大きさを持つ星になったこのヴィーラントに、数千年後再び出会い、対面するであろうとしても、そのことを驚くことなく全く私の見解通りだとさえ思うにちがいないでしょう⁸⁷⁾。」

マカーリエ神話の核心を成すのも、彼女のエンテレケイア的精神の宇宙空間内における運行である。しかし、その精神は心ずしも現実を排除したり、或いはそれから逃避したりするような、単なる空想的遊びから出て来たのではない。むしろ、そのエンテレケイア的精神は現実と積極的に関わっているのである。このことについて、シャーデヴァルトも「ゲーテ的意味におけるエンテレケイアは…あらゆる現実の困難を引き受けてこれを克服する活動の、原型なのである⁸⁸⁾」と言っているのである。

余論——『遍歴時代』におけるエロチックな象徴表現

馬はこの小説の中で、フェーリクスと密接な関連を有しており、それは彼の性的な衝動を象徴的に示している。すなわち、フェーリクスはほとんど常に荒々しい騎手として描かれているのである。例えば「ヘルジーリエは自分の傍らを騎行するフェーリクス¹⁾」に言う——「あそこをご覧なさいな、あれはどんな花かしら？ あの花は丘の南側全体を覆っているけれど、私まだ一度もあんな花見たことがないのよ²⁾。」すると彼は恋する人のために「直ちに自分の馬に鞭をあて、その場所目指して疾駆した³⁾」のである。更にまた、フェーリクスは自分のことを「馬の先生」とも呼んでいるのである——「フェーリクスはヘルジーリエを愛しています。馬の先生は間もなく参ります⁴⁾。」この「銘⁵⁾」からも、馬がフェーリクスにおいてはエロチックな衝動の象徴であることが明らかであろう。

「小箱」もまた一つのエロチックな象徴であると思われる⁶⁾。フェーリクスが「小箱」を発見し、それが後にヘルジーリエの手に入るのである。既に古代において小箱はエロチックなシンボルであった。それというのも、ギリシャで

エレウシス秘教の密儀において用いられた小箱 *κίστη* の中身は、デメテルの母胎⁷⁾、つまり女性の陰部 *αἰδοῖον γυναικεῖον* であったからである⁸⁾。ゲーテがこのエレウシスの秘儀の小箱を熟知していたことは、彼がこれを『ローマ悲歌』第12歌において歌っている⁹⁾ ことから歴然としている。彼はこのような伝統を踏まえて、『遍歴時代』の中で「小箱」を意図的に性的象徴として使っている、と考えると差し支えないであろう。

註

- 1) Vgl. Schädel, Chr. H.: *Metamorphose und Erscheinungsformen des Menschseins in „Wilhelm Meisters Wanderjahren“*, Marburg 1969 (以下 Schädel と略), S. 261, Anm. 487 u. den Kommentar zu *θαυμάζειν* von E. Trunz (Johann Wolfgang von Goethe: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, München 1982—以下 HA と略—Bd. 8, S. 582).
- 2) HA, Bd. 14, S. 53 f.
- 3) HA, Bd. 10, S. 57.
- 4) HA, Bd. 8, S. 65.
- 5) a. a. O., S. 451.
- 6) a. a. O., S. 441.
- 7) Ebd.
- 8) a. a. O., S. 352.
- 9) a. a. O., S. 586.
- 10) a. a. O., S. 585.
- 11) a. a. O., S. 444 f.
- 12) a. a. O., S. 445.
- 13) Schädel, a. a. O., S. 111.
- 14) Vgl. HA, Bd. 8, S. 671.
- 15) a. a. O., S. 75.
- 16) a. a. O., S. 73.
- 17) a. a. O., S. 68 u. S. 69.
- 18) a. a. O., S. 84.
- 19) a. a. O., S. 114.
- 20) a. a. O., S. 154.
- 21) a. a. O., S. 114.
- 22) David, C.: *Goethes „Wanderjahre“ als symbolische Dichtung*. In :

Ordnung des Kunstwerks, Göttingen 1983, S. 29 ff., hier S. 30.

- 23) HA, Bd. 8, S. 115.
- 24) HA, Bd. 13, S. 521.
- 25) HA, Bd. 8, S. 116.
- 26) a. a. O., S. 115.
- 27) a. a. O., S. 118.
- 28) Ebd.
- 29) a. a. O., S. 449.
- 30) a. a. O., S. 118.
- 31) a. a. O., S. 259.
- 32) Schlaffer, H.: Wilhelm Meister. Das Ende der Kunst und die Wiederkehr des Mythos, Stuttgart 1980, S. 189.
- 33) HA, Bd. 8, S. 259.
- 34) a. a. O., S. 260.
- 35) Vgl. Schlaffer, a. a. O., S. 186.
- 36) HA, Bd. 6, S. 484.
- 37) a. a. O., S. 443. 当時実際に「鉱石を感じる能力のある男」がいたという—
Fischer, K.: Schellings Leben, Werke und Lehre, Heidelberg ²1899, S. 140 ff.
- 38) HA, Bd. 8, S. 121.
- 39) a. a. O., S. 122.
- 40) HA, Bd. 13, S. 495.
- 41) HA, Bd. 8, S. 122.
- 42) HA, Bd. 1, S. 374.
- 43) HA, Bd. 8, S. 125.
- 44) Ebd.
- 45) Ebd.
- 46) Ebd.
- 47) Ebd.
- 48) a. a. O., S. 126.
- 49) Ebd.
- 50) Ebd.
- 51) Ebd.
- 52) Ebd.
- 53) Brief an Chr. D. Buttell vom 3. Mai 1827. In: Goethes Werke (Weimarer Ausgabe—以下 WA と略), IV. Abt., 42. Bd., Weimar 1907, S. 167.

- 54) HA, Bd. 8, S. 193.
- 55) a. a. O., S. 223.
- 56) Ebd.
- 57) Ebd.
- 58) Ebd.
- 59) a. a. O., S., 449.
- 60) Ebd.
- 61) Ebd.
- 62) 1808年3月17日の日記から—WA, III. Abt. 3. Bd., S. 336 f.
- 63) HA, Bd. 8, S. 449.
- 64) a. a. O., S. 450.
- 65) Ebd.
- 66) Ebd.
- 67) a. a. O., S. 451.
- 68) a. a. O., S. 452.
- 69) エンテレケイアに関しては, Gallig, K. (Hg.): Die Religion in Geschichte und Gegenwart. II. Bd., Tübingen ³1958, Sp. 495; Ritter, J. (Hg.): Historisches Wörterbuch der Philosophie. Bd. 2, Darmstadt 1972, Sp. 506 ff.; Höfer, J./Rahner, K. (Hg.): Lexikon für Theologie und Kirche. 3. Bd., Freiburg ²1953, Sp. 895. を参照。
- 70) HA, Bd. 8, S. 451 f.
- 71) z. B. De an. 414 a 16 f.
- 72) Schadewaldt, W.: Faust und Helena. In: ders.: Goethestudien. Natur und Altertum, Zürich u. Stuttgart 1963, S. 165 ff., hier S. 200.
- 73) Ebd.
- 74) Ebd.
- 75) Met. 1050 a 21 ff.
- 76) Tusc. I, 10, 22.
- 77) Tusc. I, 10 gegen Ende.
- 78) Ritter, a. a. O., Sp. 506 f.
- 79) a. a. O., Sp. 507.
- 80) Leibniz, G.W.: Principes de la Nature et de la Grace fondés en Raison. Monadologie, Hamburg 1956, S. 32 ff.
- 81) Brief an Zelter vom 19. März 1827. In: WA, IV. Abt., 42. Bd., S. 95.
- 82) Eckermann, J.P.: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines

- Lebens. Hg. v. H. H. Houben, Wiesbaden 1959, S. 282 (Gespräch am 1. September 1829).
- 83) Vgl. Bauer, G.—K.: Makarie. In: GRM 25 (1937), H. 5/6, S. 178 ff., hier S. 188.
- 84) WA, II. Abt., 15. Bd., S. 165.
- 85) HA, Bd. 3, S. 359.
- 86) Ebd.
- 87) am 25. Januar 1813. In: Goethes Gespräche. Hg. v. W. F. v. Biedermann. 3. Bd., Leipzig 1889, S. 70.
- 88) Schadewaldt, W.: Goethes Begriff der Realität. In: ders.: Goethestudien. Natur und..., S. 223 ff., hier S. 227.

註 (余論)

- 1) HA, Bd. 8, S. 71.
- 2) a. a. O., S. 71 f.
- 3) a. a. O., S. 72.
- 4) a. a. O., S. 265.
- 5) Ebd.
- 6) Vgl. Ohly, Fr.: Zum Kästchen in Goethes „Wanderjahren“. In: ZfdA 91 (1961/62), S. 255 ff., hier S. 255; Schlaffer, a. a. o., S. 175 ff.
- 7) Leipoldt, J.: Eleusis. In: Reallexikon für Antike und Christentum IV, Stuttgart 1959, Sp. 1100 ff., hier Sp. 1102.
- 8) Kern, O.: Die eleusinischen Weihen. In: PAULY-WISSOWA: Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft XVI, Stuttgart 1935, Sp. 1211 ff., hier Sp. 1238 f. Vgl. auch Nilsson, M. P.: Geschichte der griechischen Religion. Bd. 1, München 1941, S. 624; Mau: Cista. In: PAULY-WISSOWA III (1899), Sp. 2591 ff., hier Sp. 2592.
- 9) HA, Bd. 1, S. 164 f.

Sonstige benutzte Texte:

- Aristoteles: De anima. Hg. v. W. D. Ross, Oxford 1979.
- Metaphysica. Hg. v. W. Jaeger, Oxford 1957.
- Cicero: Tusculanae Disputationes. Recognovit M. Pohlenz, Stuttgart 1965.
- Platon: Opera. Hg. v. I. Burnet. 5 Bde., Oxford 1955 ff.
- Sämtliche Werke. In und nach der Übersetzung v. Fr. Schleiermacher u. H. Müller. Hg. v. W. F. Otto, E. Grassi u. G. Plamböck. 6 Bde., Hamburg 1982 f.